

第1章 黒石市の現況特性と課題

1. 都市の現況

1) 人口・世帯動向と将来の見通し

(1) 総人口・世帯数

総人口は、平成2年から減少傾向が続いています。世帯数は、平成17年をピークに減少傾向となっており、平均世帯人員は減少傾向が続いています。平成27年には3人未満となっており、核家族化が進んでいる傾向が伺えます。

図 総人口・世帯数の推移

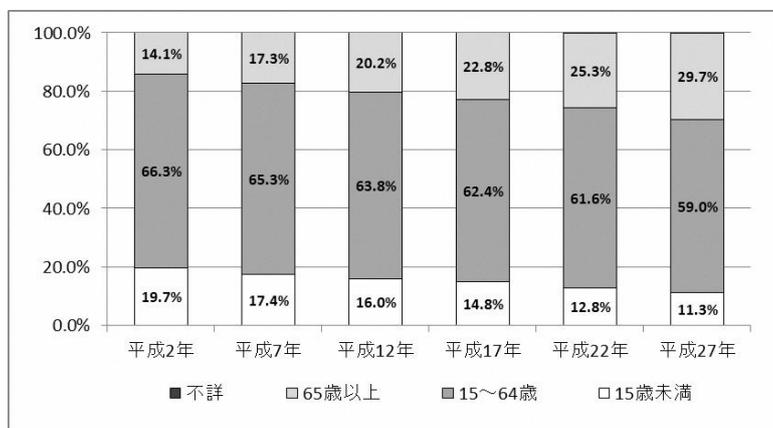


出典：国勢調査（平成2年～平成27年）

(2) 年齢3区分別人口構成比

「15歳未満」及び「15～64歳」の人口構成比は減少傾向にあり、特に「15歳未満」の減少率が大きくなっています。一方で、「65歳以上」は増加傾向にあり、平成27年には総人口の約3割を占めています。

図 年齢3区分別人口構成比



出典：国勢調査（平成2年～平成27年）

(3) 地域別の人口増減率の推移

追子野木地区では、平成7年から増加傾向が続いています。東地区や六郷地区では平成2年まで減少傾向が続き、平成27年には増加に転じています。

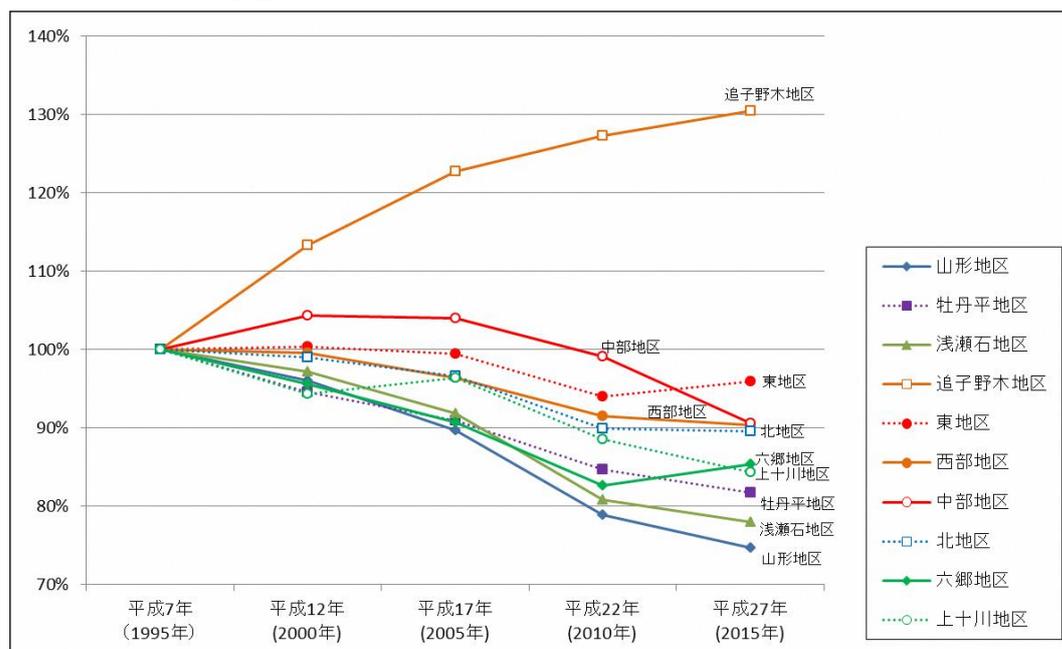
その他の地区では、基本的には減少傾向にあり、山形地区、浅瀬石地区では、減少傾向が顕著となっています。

表 地区別人口の推移

(単位：人)

地区	平成7年 (1995年)	平成12年 (2000年)	平成17年 (2005年)	平成22年 (2010年)	平成27年 (2015年)
山形地区	3,375	3,242	3,025	2,663	2,521
	100.0%	96.1%	89.6%	78.9%	74.7%
牡丹平地区	1,866	1,764	1,696	1,579	1,525
	100.0%	94.5%	90.9%	84.6%	81.7%
浅瀬石地区	2,860	2,780	2,627	2,311	2,231
	100.0%	97.2%	91.9%	80.8%	78.0%
追子野木地区	2,380	2,696	2,921	3,028	3,104
	100.0%	113.3%	122.7%	127.2%	130.4%
東地区	6,927	6,952	6,885	6,511	6,641
	100.0%	100.4%	99.4%	94.0%	95.9%
西部地区	5,669	5,640	5,465	5,188	5,124
	100.0%	99.5%	96.4%	91.5%	90.4%
中部地区	8,157	8,513	8,479	8,079	7,391
	100.0%	104.4%	103.9%	99.0%	90.6%
北地区	2,370	2,347	2,289	2,131	2,121
	100.0%	99.0%	96.6%	89.9%	89.5%
六郷地区	2,365	2,261	2,144	1,955	2,018
	100.0%	95.6%	90.7%	82.7%	85.3%
上十川地区	3,035	2,864	2,924	2,687	2,558
	100.0%	94.4%	96.3%	88.5%	84.3%
全市	39,004	39,059	38,455	36,132	35,234
	100.0%	100.1%	98.6%	92.6%	90.3%

表 平成7年人口を基準とした時の人口増減率



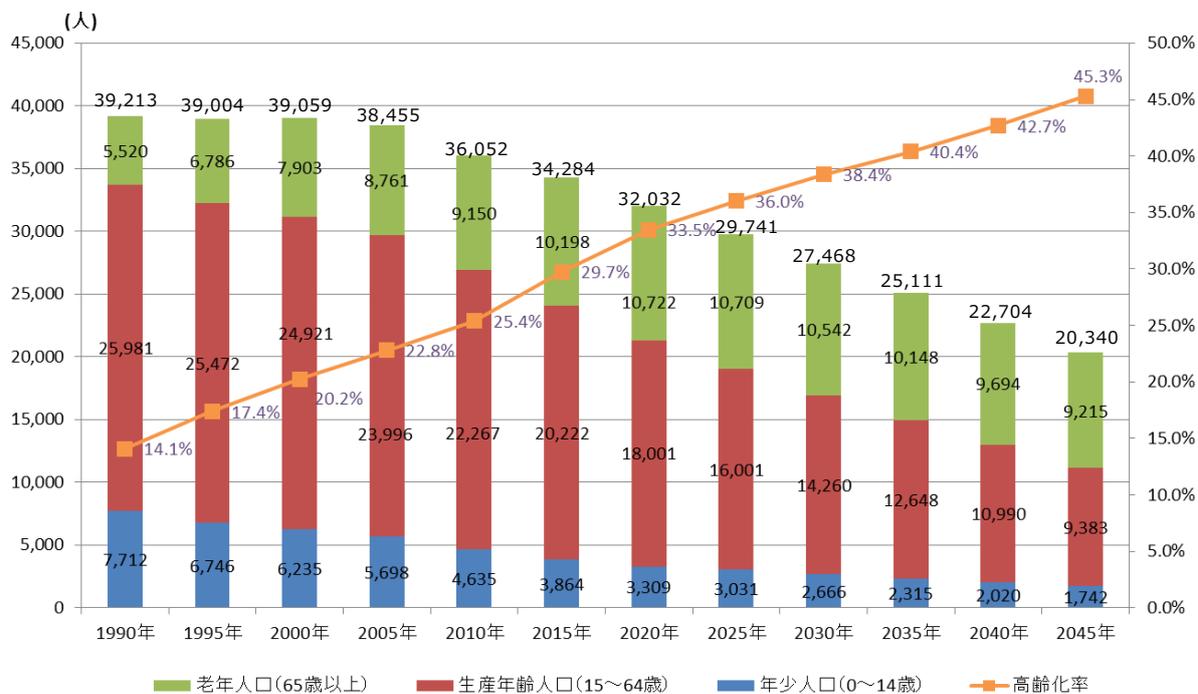
出典：黒石市人口ビジョン（資料：国勢調査（平成7年～平成22年）／住民基本台帳（平成27年）

(4) 将来人口の見通し

国立社会保障・人口問題研究所の推計準拠による人口推計結果では、平成27年から2045年の30年間で人口は約14,000人減少し、高齢化率は15ポイント以上増加しています。

人口構造では、0～14歳の年少人口と15～64歳の生産年齢人口の割合は減少傾向が続き、2045年には生産年齢人口と高齢者の人口がほぼ同数となっています。

図 将来人口推計（年齢構成別）



出典：「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）」国立社会保障・人口問題研究所

2) 人口分布の状況

(1) 100mメッシュ人口（平成22年と2030年推計）

平成22年では大部分の人口が都市計画区域内に分布しています。中部・西部・追子野木・東地区では、用途地域を中心に面的に分布しており、その他の地域では帯状に分布しています。市街地では、人口が20～40人/ha以上のメッシュが広がっていますが、用途地域の縁辺部や中心市街地では、20人/ha未満の箇所がみられます。

2030年の将来推計をみると、中心市街地の周辺や用途地域の縁辺部の一部で40人/ha以上を維持するエリアがみられるものの、市街地の広い範囲で20人/ha未満のメッシュが多くみられ、特に用途地域外の集落地と中心市街地において顕著になっています。

図 100mメッシュ人口分布（平成22年）（参考：国勢調査（平成22年））

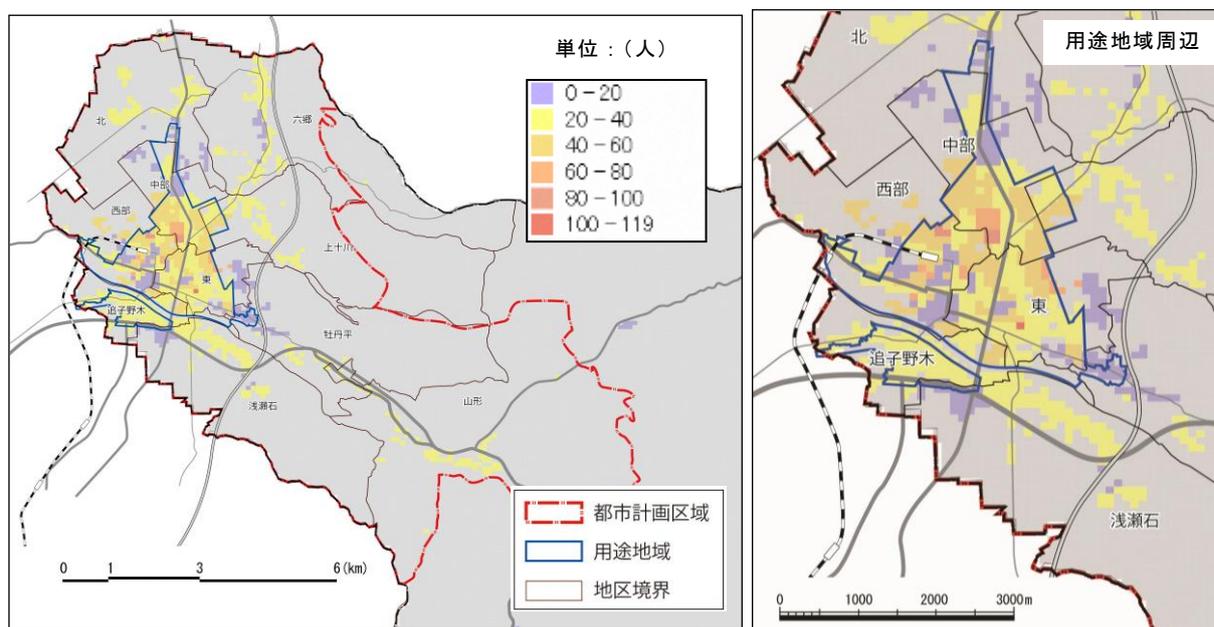
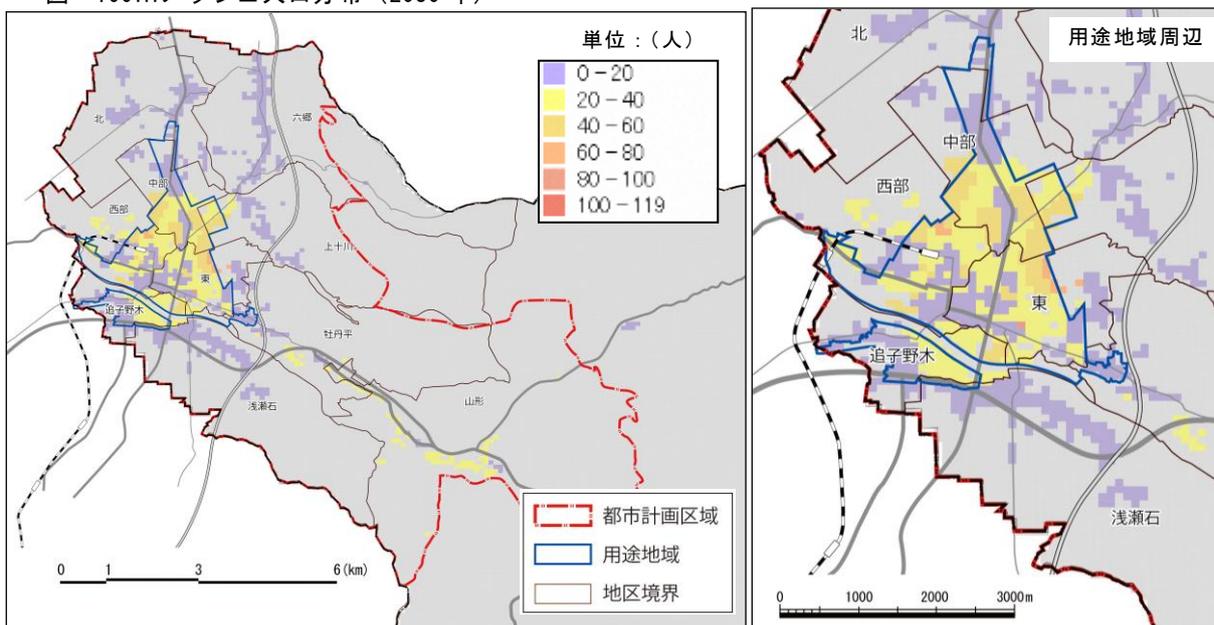


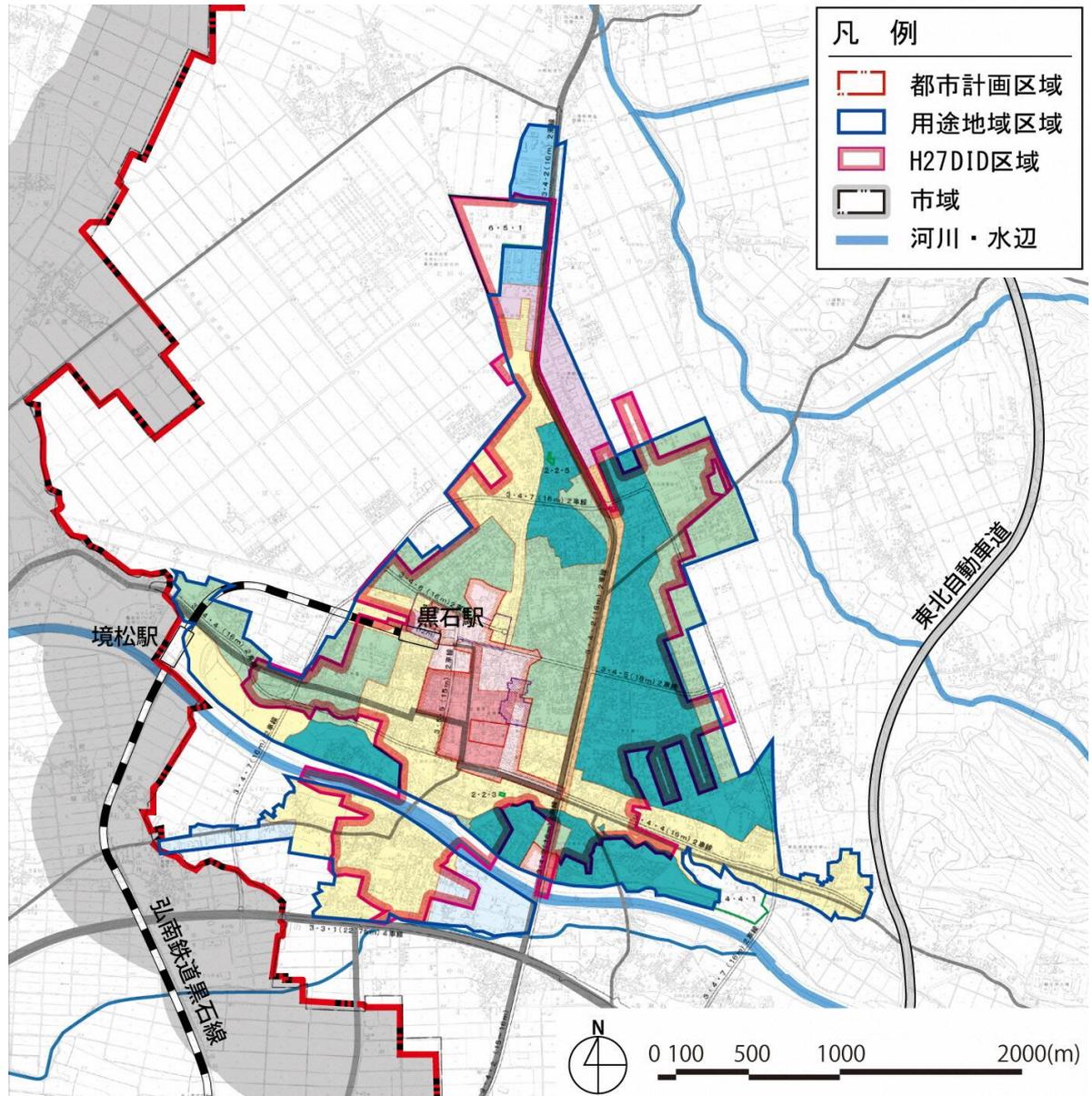
図 100mメッシュ人口分布（2030年）



(2) 人口集中地区 (DID)

平成27年のDIDは、ほぼ用途地域区域内に収まっており、比較的コンパクトな市街地が形成されています。

図 人口集中地区 (DID) の状況 (平成27年) (参考: 人口集中地区 (DID) 平成27年)



3) 土地利用

平成 29 年度の土地利用現況は、山林が 134.94 km²と最も広く、総面積の 62.17%（国有林 48.21%、民有林 13.96%）を占めています。次いで、田 20.09 km²（9.26%）、畑 19.86 km²（9.15%）と農用地が総面積の 18.41%を占め、平成 27 年度からの推移に大きな変化は見られませんが、農地（田）の減少や宅地の増加がみられます。

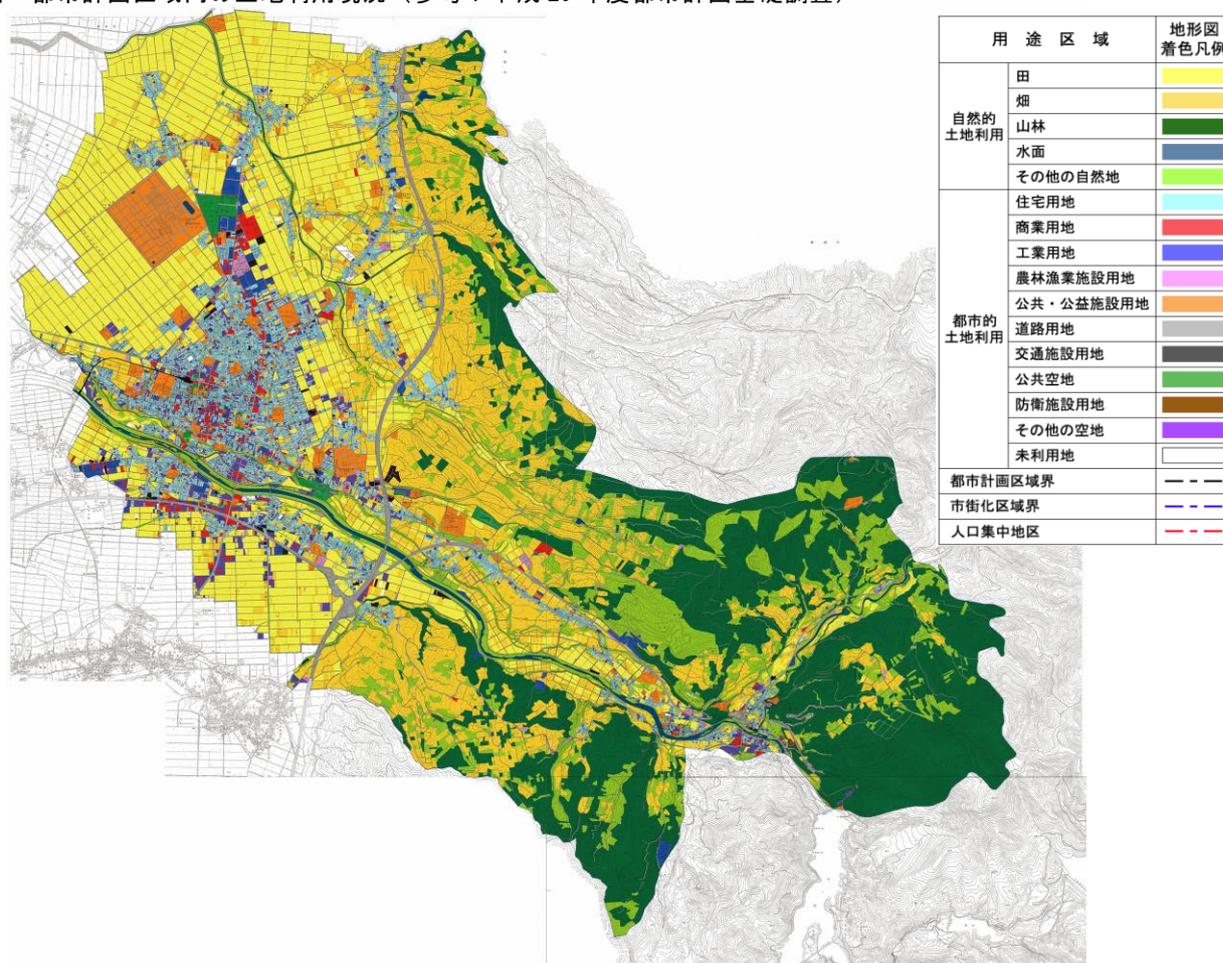
河川沿いの平坦地や黒石台地上に広がる水田、斜面地の地形を生かしたりんご畑を背景に、江戸時代に黒石藩が置かれた時の町割りを基本とした中心市街地、中心市街地周辺と浅瀬石川沿いの住宅地、旧街道筋を中心に形成された集落地など、合理的な土地利用が成されています。

表 土地利用現況（各年 1 月 1 日現在）（単位：km²）

年次	田	畑	山林		原野	雑種地	宅地	その他	計
			国有林	民有林					
27	20.16	19.88	104.63	30.29	13.98	2.19	8.81	17.11	217.05
28	20.12	19.86	104.63	30.30	13.99	2.17	8.85	17.13	217.05
29 (構成比)	20.09 9.26%	19.86 9.15%	104.63 48.21%	30.31 13.96%	13.99 6.44%	2.17 1.00%	8.88 4.09%	17.12 7.89%	217.05 100.0%

出典：2018 年市勢概要『くろいし』

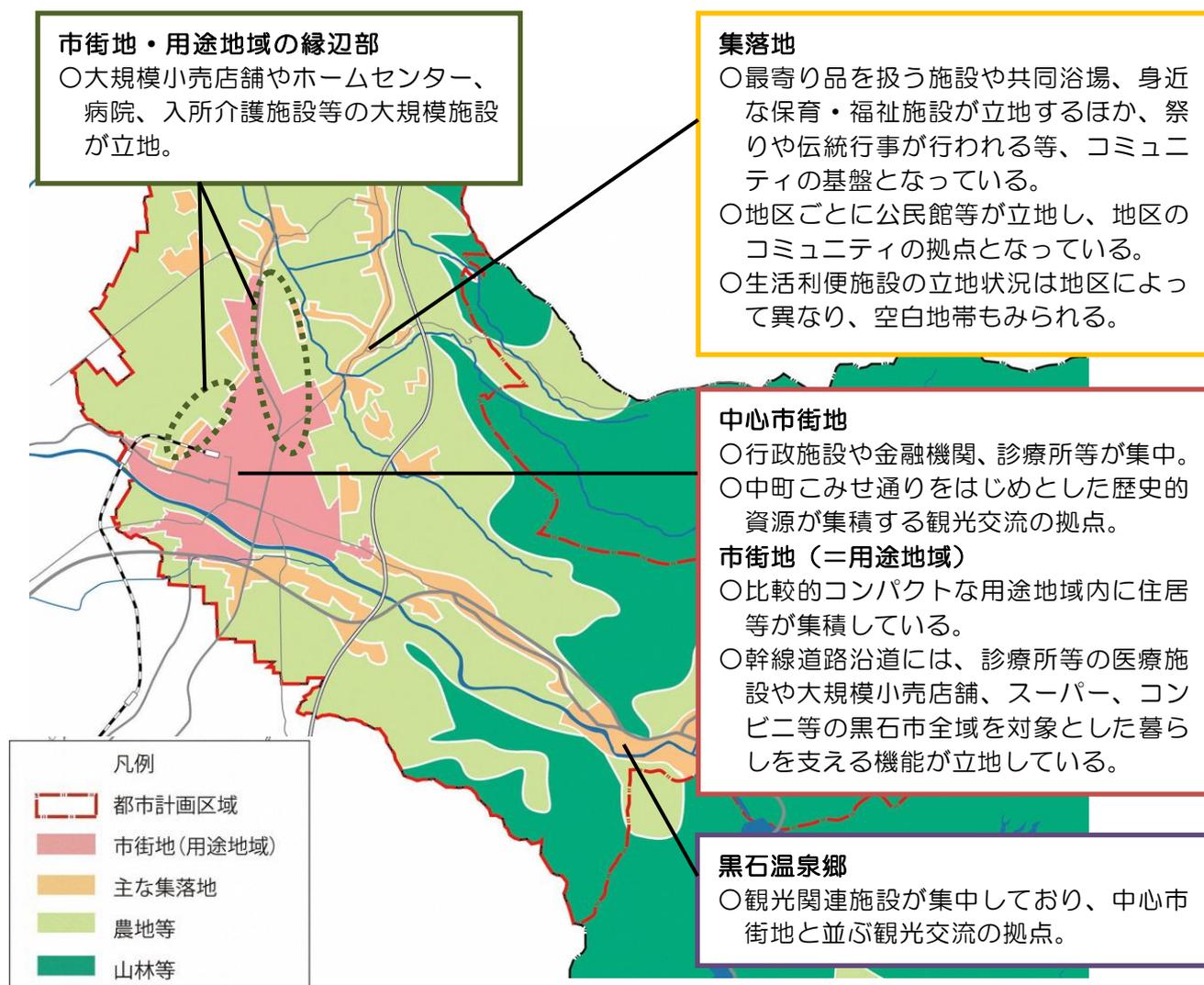
図 都市計画区域内の土地利用現況（参考：平成 29 年度都市計画基礎調査）



4) 生活利便性

(1) 都市機能の分布状況

- 大規模小売店舗やホームセンター、病院、入所介護施設等の大規模施設は、概ね用途地域の縁辺部や白地地域に立地しています。
- 中心市街地には、行政施設や金融機関、診療所等が集中しているほか、中町こみせ通りをはじめとした観光交流の拠点となっています。
- 集落地では、各小学校周辺に公民館や児童センター、保育園等が立地しており、小学校や公民館が地区のコミュニティの拠点となっています。
- 郵便局や農協、コンビニ等の生活利便施設は、地区によって立地状況が異なり、空白地帯もみられます。
- 小中学校の適正配置により、2020年度までに小学校4校、中学校2校に統廃合することとなっており、徒歩圏外になる児童も少なくなく、スクールバスの運行等とあわせたアクセス性の強化等を検討する必要があります。
- 黒石温泉郷を中心とした山形地区には、観光関連施設が集中しており、中心市街地と並ぶ観光交流の拠点となっています。



(2) 公共交通ネットワーク

①公共交通の運行状況

黒石市内には鉄道（弘南鉄道）、路線バス（弘南バス）、コミュニティバス（回遊バスぷらっと号）、タクシーといった公共交通が運行しています。また、スクールバス、病院送迎バス等の多様な交通形態が存在しています。

図 公共交通網現況



資料：平成 28 年度黒石市地域公共交通網形成計画策定調査業務報告書より作成

【鉄道】

黒石市には、弘南鉄道株式会社が運行する弘南鉄道弘南線があり、黒石駅と境松駅の2駅があります。平日・休日ともに同じダイヤで運行しており、一部の時間帯を除き、1日に上下各29便が30分間隔（一部1時間間隔）で運行しています。

【路線バス】

黒石市内においては、弘南バス株式会社が路線バスを運行しており、黒石駅を中心として東西南北にバス路線が走っています。

北方面には、青森市とつなぐ路線を運行しており、青森駅、青森県庁、新青森駅などに連絡しています。また、奥羽本線と連絡する路線を運行しています。

南方面には、黒石駅・尾上駅と黒石病院とをつなぐ路線を運行しています。

西方面には、黒石駅と弘前バスターミナルを結ぶ路線や、黒石駅と聖愛高校を結ぶ路線、藤崎駅と黒石高校・黒石商業高校を結ぶ路線が運行しています。

東方面には、黒石駅と大川原を結ぶ路線や黒石病院・虹の湖公園を結ぶ路線、黒石駅と温川を結ぶ路線、板留と弘前南高校を結ぶ路線を運行しています。

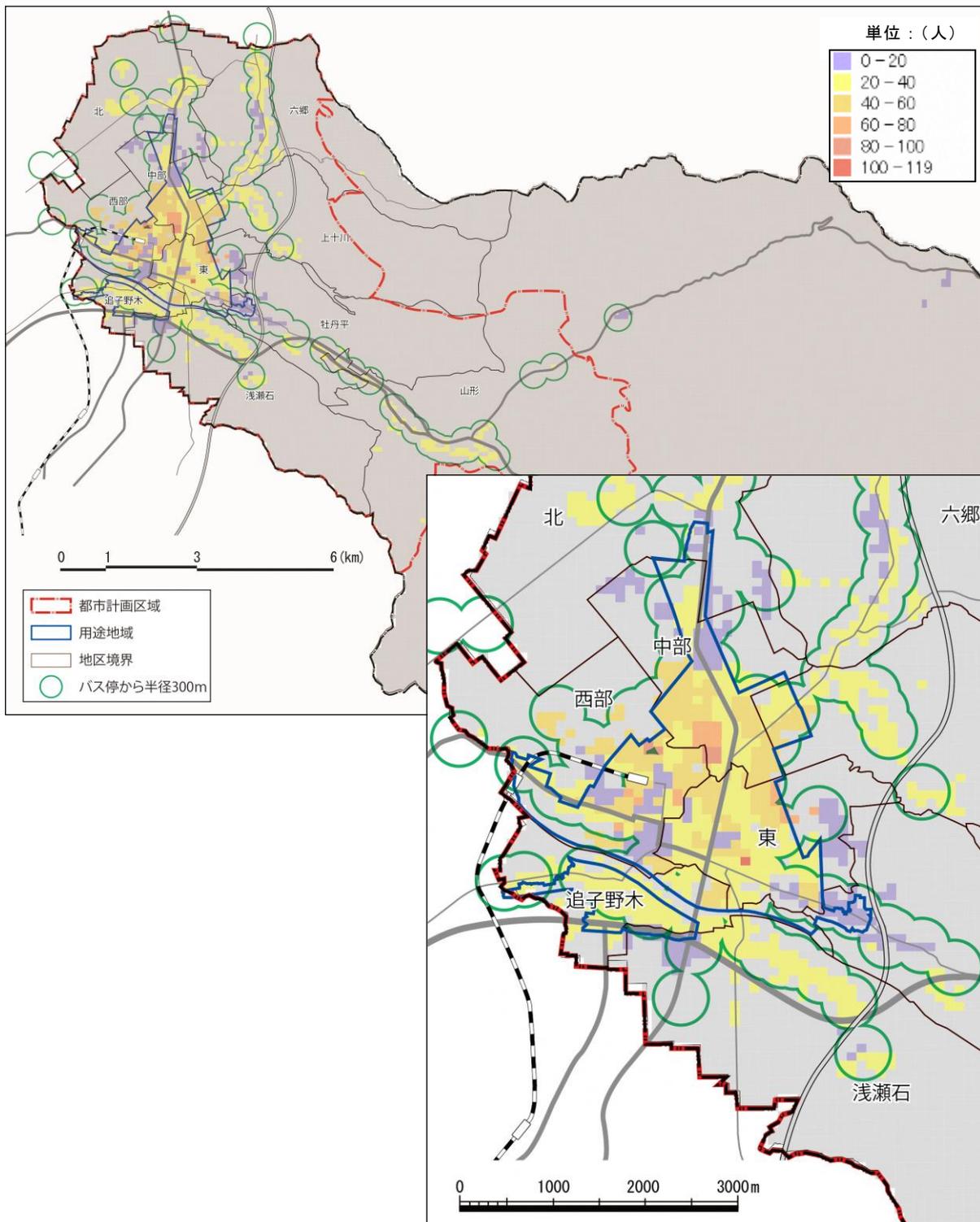
【コミュニティバス「回遊バス ぷらっと号」】

高齢者等の交通弱者対策と中心市街地の活性化を目的に導入したコミュニティバス「回遊バス ぷらっと号」を運行しています。黒石駅や黒石市役所などの中心市街地と黒石病院や市内様々な施設を結ぶルート（5コース）を運行しています。

②バス停から 300m以内の人口分布

人口は、バス停から半径 300m 以内の範囲に概ね含まれていますが、北地区や山形地区ではバス停から 300m 以上離れた箇所にも居住が見られます。

図 バス停から 300m以内の人口分布（平成 22 年）（参考：国勢調査（平成 22 年））

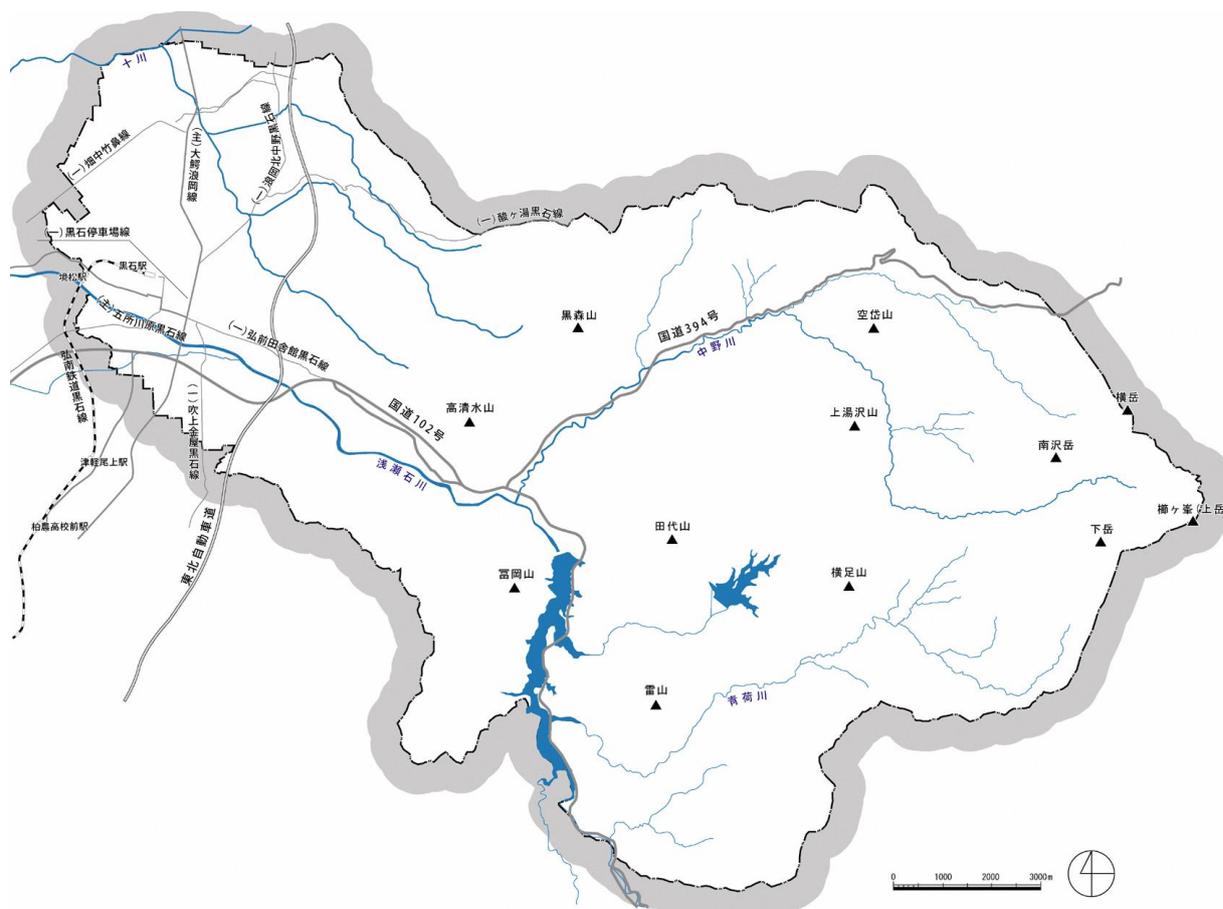


③道路交通

【広域的な道路交通体系】

広域な交通ネットワークとして、東北自動車道が市街地東部を南北に縦貫し、東西には市域を横断する国道 102 号、394 号が整備されています。国道 102 号は津軽地域の中核都市である弘前方面から黒石を通り、十和田方面へ通じ、津軽地域からの黒石への入口となっています。国道 394 号は、市の観光拠点である黒石温泉郷付近で 102 号と合流しており、津軽地域と県南地域を結び、県南地域からの重要なアクセスとなっています。

図 交通体系



資料：黒石市都市計画マスタープラン

【中心市街地における道路交通体系】

都市計画道路は、8路線、26,260m が計画決定されており、改良済延長は 11,160m で、全体の整備率は 42.5% となっています。

市役所周辺の道路は、江戸期の歴史的町割りを基盤としており、狭い道路や一方通行が多くなっています。

図 中心市街地における道路幅員別現況

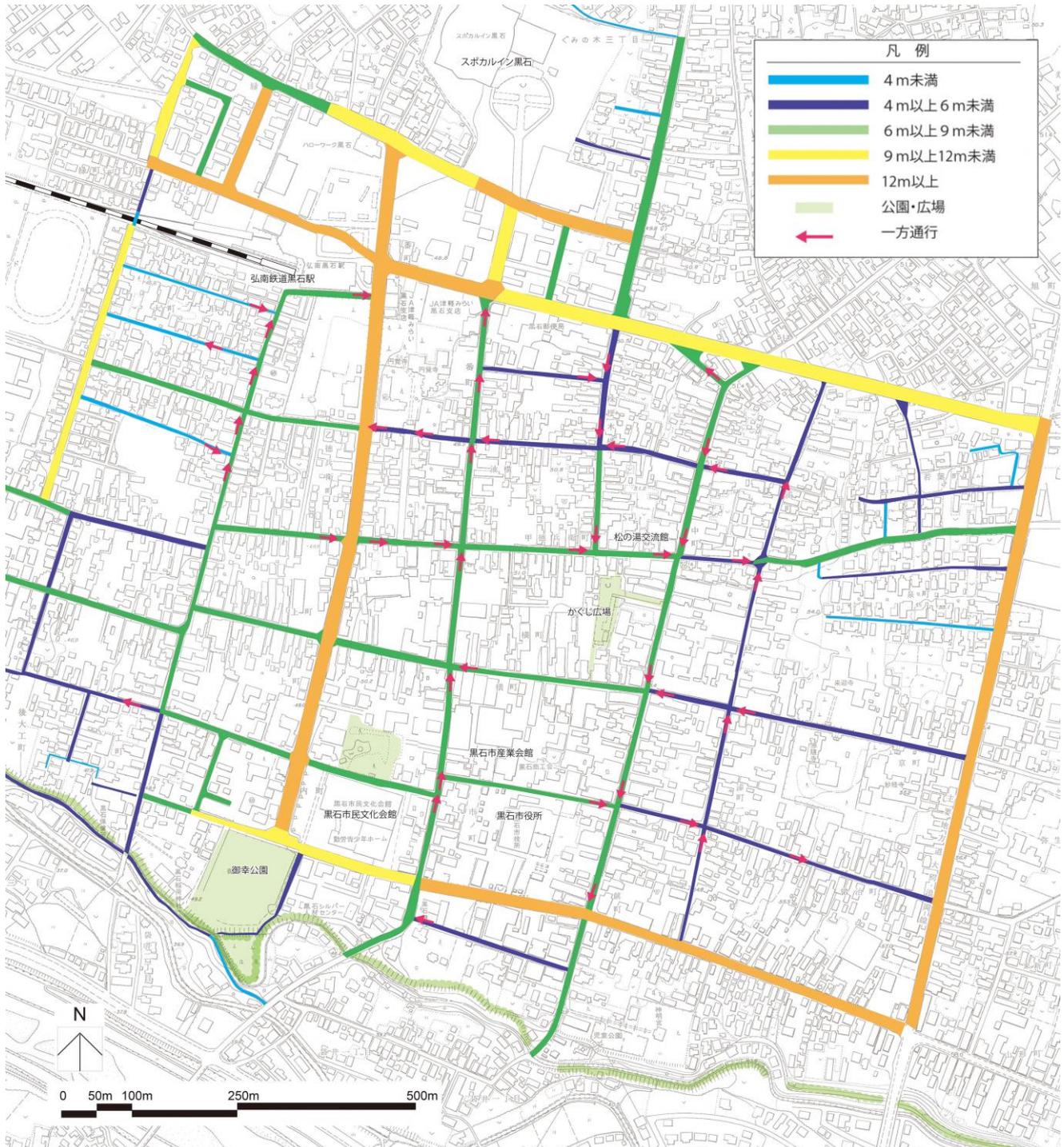
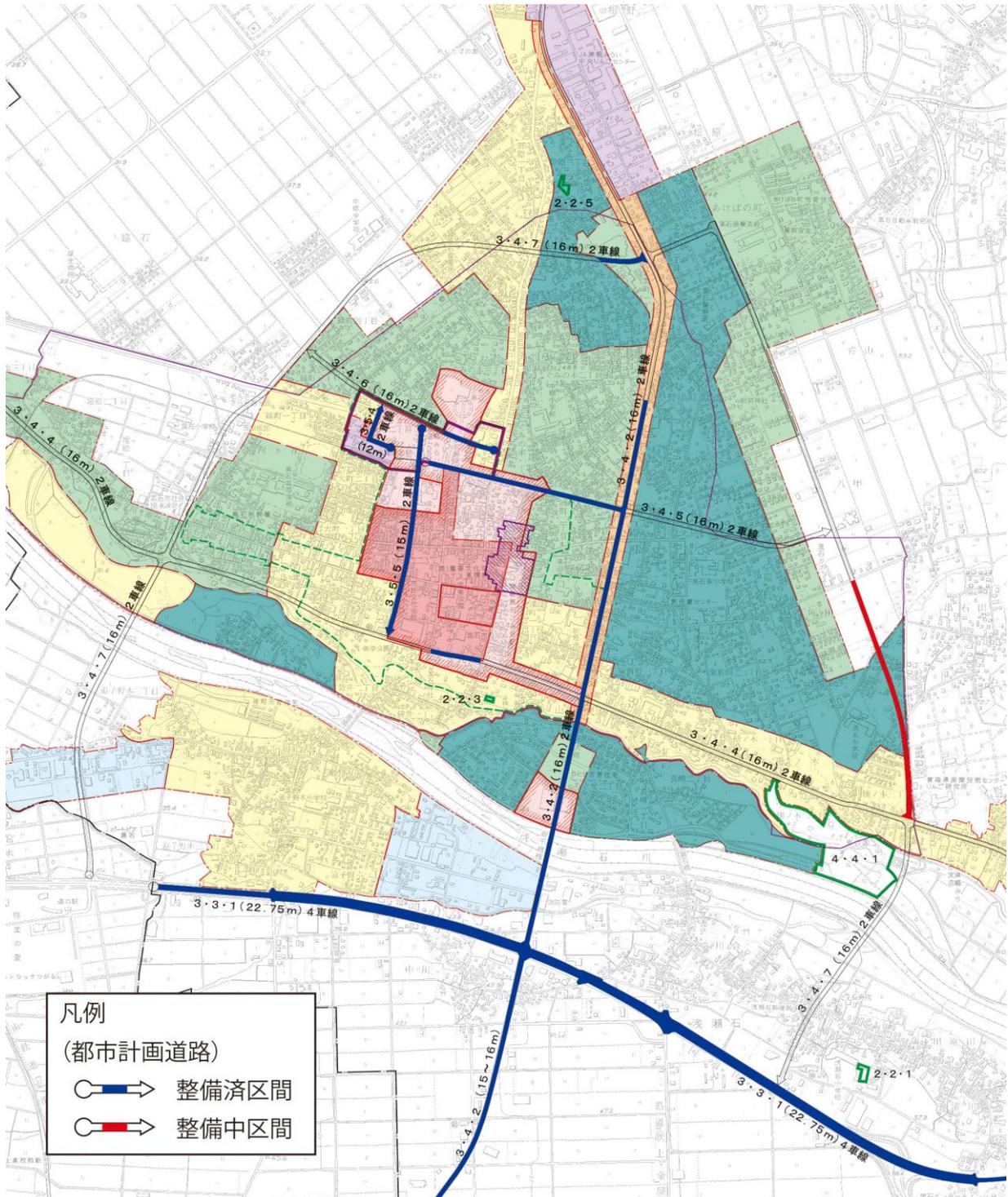


図 都市計画道路の整備状況



5) 行政運営

(1) 財政

①歳入・歳出の内訳

本市の平成29年度の普通会計の歳入は約157億円です。その内訳として、市税や繰越金、分担金及び負担金などの自主財源は約41億円(26%)である一方、地方交付税や国・県支出金、市債等の依存財源は約116億円(74%)となっています。

歳入は、平成26年度以降は減少傾向にあり、今後も経常的な歳入の増加が見込めない状況が続いていくと予想されます。

また、平成29年度の普通会計の歳出は約154億円です。内訳を見ると、支払いが義務づけられ任意に削減することが難しい人件費、扶助費、公債費の「義務的経費」が約82億円(53%)を占め、次いで他会計への繰出金や物件費などの「その他の経費」が約62億円(40%)、普通建設事業費等に充てられる「投資的経費」が約10億円(7%)となっています。

図 普通会計における歳入の推移 (単位：千円)

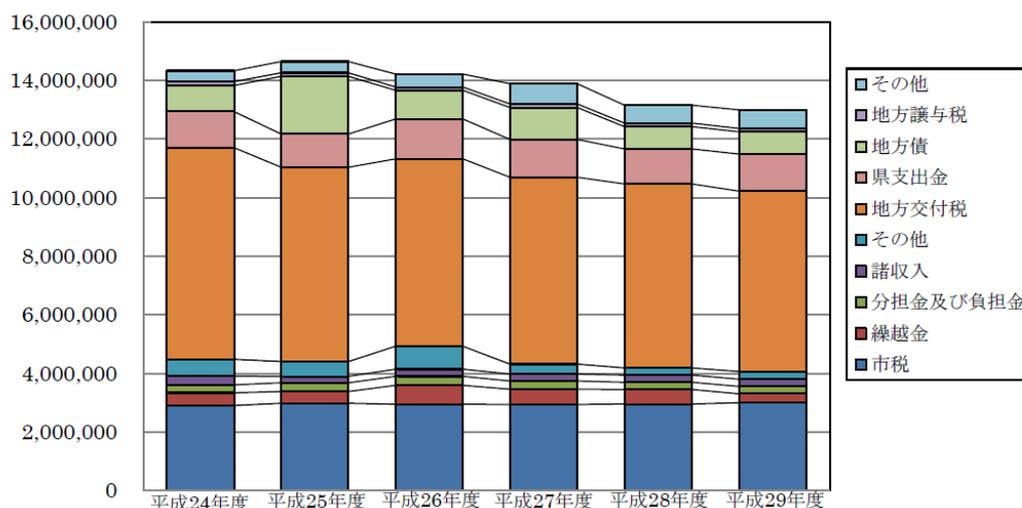
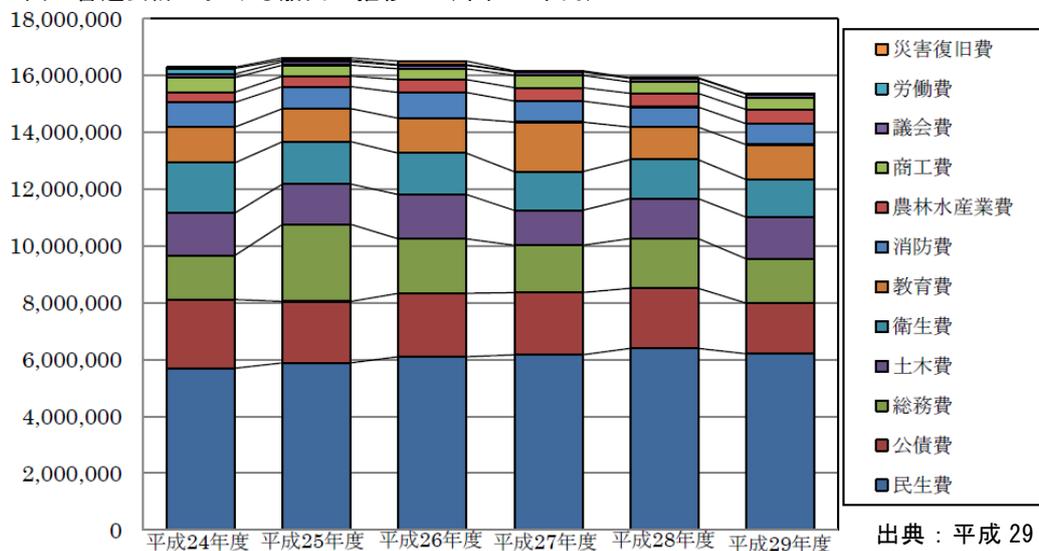


図 普通会計における歳出の推移 (単位：千円)



出典：平成29年度黒石市の財政状況

②将来の更新費用の推計（公共施設及びインフラ資産）

現状の公共施設保有面積は 177,776 m²で、市民一人当たり 5.05 m²を保有しており、直近 5 年間における市民一人当たりの投資的経費は年平均 10,813 円です。

現在の保有面積を今後も維持した場合、人口減少の影響も考慮すると 40 年後には 106,415 円と実質的に現行の 9.8 倍以上の負担となる計算になります。

一方、現状の投資的経費を今後も維持した場合、更新できる保有面積は約 32,000 m²まで減少することとなり、延床面積ベースで 82%の施設が維持できなくなる計算となります。現在の小中学校の総床面積が約 68,000 m²ですので、相当の公共施設を廃止しなければならないこととなります。

また、インフラ施設においては公共施設より負担が増加する傾向にあり、道路については、今後一切の新規道路建設を行わず、これまで整備した道路の維持更新のみを行ったとしても、一人当たりの年間負担額は 4,995 円から 40,659 円に、橋りょうでは 596 円から 5,522 円に、上水道では 1,930 円から 17,569 円に、下水道では 1,561 円から 15,059 円にまで負担の増額が必要となります。

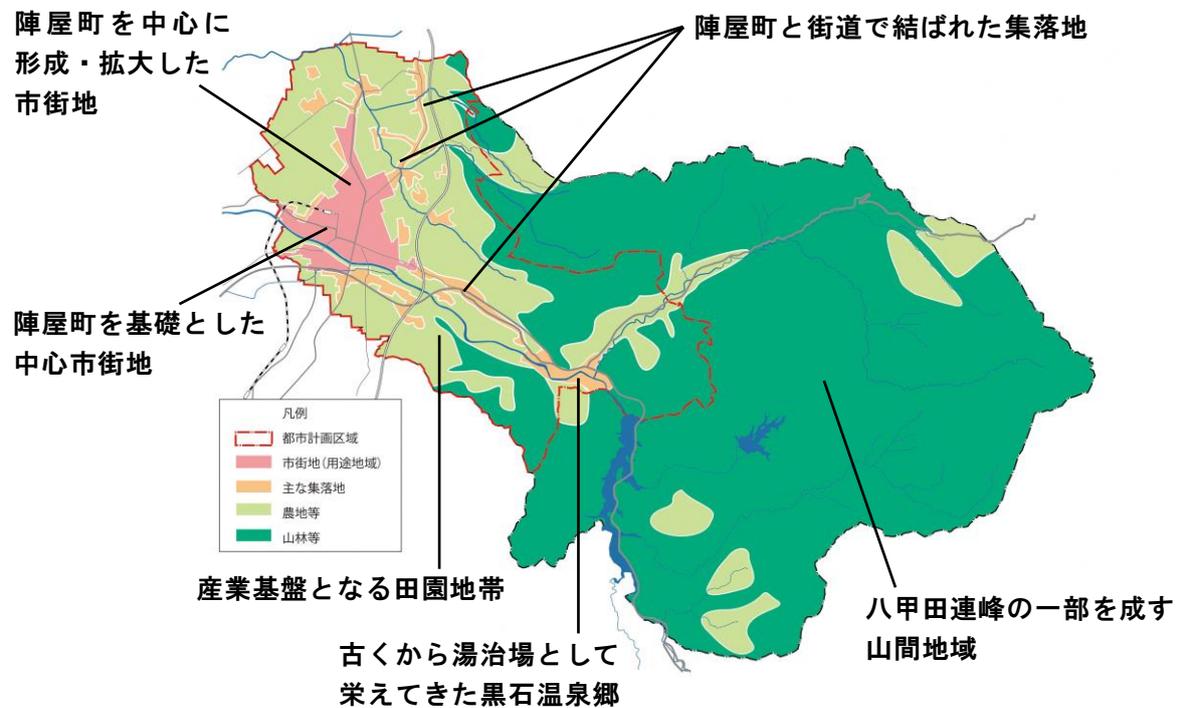
表 人口減少も考慮した将来の更新費用の推計（参照：黒石市公共施設等総合管理計画）

	即往実績（過去5年）		40年後の推計		倍率 B/A
	人口 35,234人		人口 19,922人		
	投資的経費		投資的経費		
	単年平均	1人あたりA	単年平均	1人あたりB	
公共施設	3.81億円	10,813円	21.2億円	106,415円	9.84
道路	1.76億円	4,995円	8.1億円	40,659円	8.14
橋りょう	0.21億円	596円	1.1億円	5,522円	9.27
上水道	0.68億円	1,930円	3.5億円	17,569円	9.10
下水道	0.55億円	1,561円	3.0億円	15,059円	9.65
合計	7.01億円	19,895円	36.9億円	185,224円	9.31

2. 計画策定にあたって踏まえるべき黒石市の特性

1) 都市構造

黒石市は豊かな自然環境を背景に、江戸時代に形成された陣屋町を基盤としたコンパクトな市街地や集落地が形成されてきました。



(1) 陣屋町を基礎とした中心市街地

- 本市の中心市街地として商業・業務施設、公共・公益施設、住宅等が集積する地区であり、玄関口の1つである弘南鉄道黒石駅があります。
- 江戸時代より中町周辺は浜街道とよばれ商人地として賑わいをみせ、政治・経済・文化の面で南津軽郡の中心的な役割を果たしてきました。
- 現在も江戸期に由来するまちの形は継承されており、中町・前町・横町を中心に商業・業務施設が集積し、その周辺に住宅地が形成されています。



市の玄関口の顔づくりが期待される黒石駅周辺



伝統的形式のこみせが連続する中町



中心市街地の主要な商店街のひとつである横町

(2) 陣屋町を中心に形成・拡大した市街地

- 江戸期に築かれた町割りは、今日の市街地のまち並み景観の基礎となっており、明治期から戦前までは、これら地域が市街地として成立し南津軽の中心地として栄えました。
- 特に商工業の面においては、藩政期同様に物資の集散地として、津軽地方有数の商店街が形成され、多くの人々で賑わいました。
- 平成期に入り、バイパス沿いに郊外型大規模小売店舗の進出が相次いだことや中心市街地内の大規模小売店舗の撤退などにより、中心市街地の空洞化や商業力の低下が進行しています。近年では、この状況を踏まえ、中町の伝統的なまち並みの活用や通りの賑わいを考える商店主を中心としたグループ（横町十文字まちそだて会）による取り組みが行われるなど、中心市街地の魅力を活かそうとする動きもみられます。
- また、黒石台地の住宅地は、明治から戦前にかけて住宅が立地した中心市街地の隣接地や浜街道の沿道と、戦後に形成された住宅地に区分されますが、総じて基盤が未整備のまま住宅が立地したため、狭あいな道路で構成され、公園や広場が十分でない状況が見られます。
- 浅瀬石川北部では、計画的な住宅地の面的整備が行われ、良好な生活環境の形成が図られています。



緑化事業により季節の花に彩られた住宅地の道端

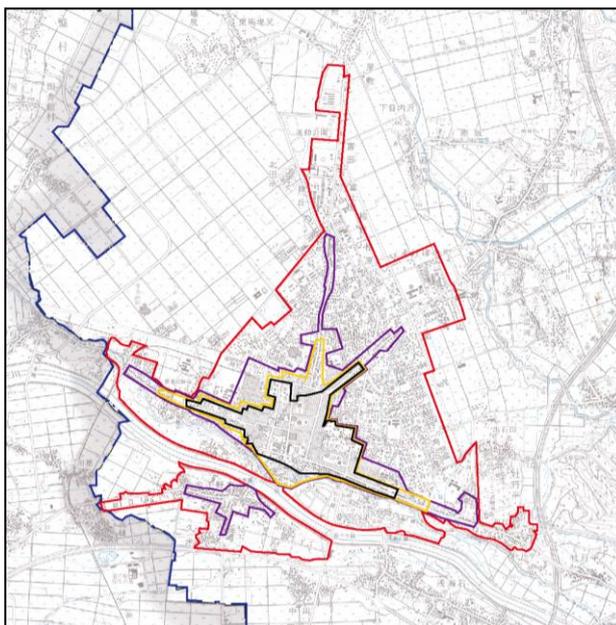


陸屋根の無落雪住宅が建ち並ぶ住宅地（ちとせ団地）



横町十文字まちそだて会によるまち歩きツアーの様子

図 市街地変遷図 （参照：平成29年度 黒石都市計画基礎調査）



凡	例
市街地の時代区分	表示
明治期の市街地	
第2次大戦前の市街地	
戦後昭和30年代の市街地	
最新の市街地	

(3) 古くから湯治場として栄えてきた黒石温泉郷

- 浅瀬石川と中野川の合流地点に、板留、落合、温湯の3つのいで湯が存在し、古くよりいで湯の地として多くの湯治客で賑わいました。
- また、津軽の伝統的な文化を発信する広域拠点施設である津軽伝承工芸館、中野川が浅瀬石川と合流する手前に位置する中野もみじ山等の観光資源が集積しており、現在でも多くの市民や観光客に親しまれ、観光・交流の拠点となっています。
- 400年の歴史を持つ温湯温泉は、共同浴場の他に木造の旅館や湯治客が逗留する客舎とよばれる宿が建ち並んでいるとともに、これらが個性ある商店と混在し、いで湯の場としての歴史や風情を感じさせるまち並みが形成されています。



木造の重厚な構えの旅館は湯治場としての歴史を感じさせる(温湯)



津軽の文化と風土を体験できる津軽伝承工芸館(落合)



色鮮やかなもみじが滝と溪流に映え、変化に富んだ情景を見せるもみじ山

(4) 陣屋町と街道で結ばれた集落地

- 黒石台地上や浅瀬石川沿いの水田に隣接して、小さくまとまった集落地が形成されています。これら集落地は、浜街道などの道路を中心に形成されたものが多く、集落地の後背に水田やりんご畑が連なっており、周辺の農地を含めた秩序ある土地利用がなされています。
- 浅瀬石川中流域周辺では、旧街道の沿道に集落地が形成されるとともに、住宅に隣接してりんご畑があり、水田は山裾まで広がり、緩やかな丘陵地は一面がりんご畑となっています。
- また、東北自動車道以東の丘陵地や中山間地には、地形に寄り添うように配置され、心地よくまとまった集落地が点在しています。これら集落地は、水田やりんご畑等の農地、周囲の里山と一体となり、総じて潤いや落ち着きを感じられる景観が形成されています。



浜街道沿いの緑豊かで落ち着いた感じられるまち並み(高館)



浅瀬石川中流では、集落地の後背に水田が広がっている(花巻)



里山に囲まれ、心地よくまとまった集落地(高館)

(5) 産業基盤となる田園地帯

- 本市の水田は、黒石台地上や浅瀬石川沿いの平地に面的に広がり、これら水田の多くは、耕地整理による農業基盤整備が行われました。
- 本市のりんご畑の多くは、標高 50~100m 程度の斜面地に帯状に広がっており、津軽地域においても大きな特徴であるといえます。このりんご畑は、地形に沿って栽培されており、黒石台地上の水田と緩斜面のりんご畑が地形と生業が生み出す黒石らしい景観の 1 つといえます。
- これらの水田やりんご畑等の農地は、都市計画区域内の土地利用の約 2 割を占め、本市の基幹産業となっています。
- しかし、一部の水田等は、高齢化や後継者不足等の影響により、長らく耕作されていない農地が点在し、一部では不法投棄が行われるなどの好ましくない状況も見られます。



台地上に広がる水田と岩木山



台地上の水田と斜面地のりんご畑（上十川）



丘陵地の地形に沿って広がるりんご畑（浅瀬石）

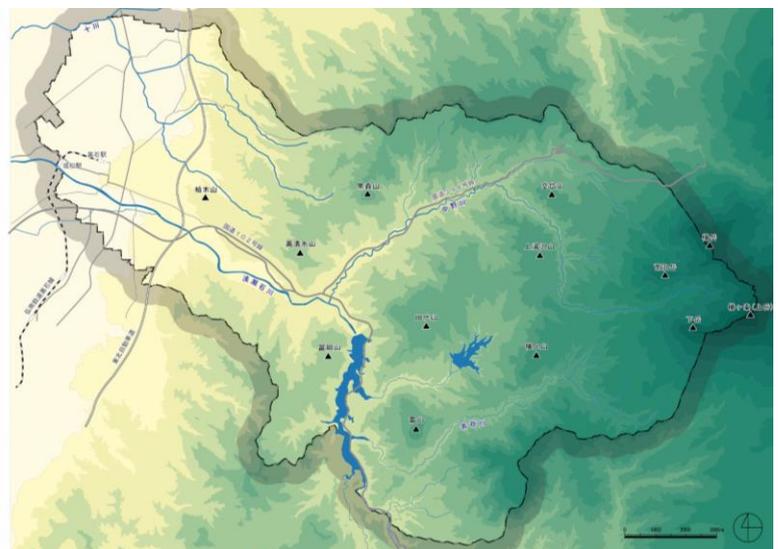
(6) 八甲田連峰の一部を成す山間地域

- 八甲田連峰の一部をなす東部の山間部は、集落に近い黒森山や富岡山等の標高 500~800 m の小さな峰を抱く山頂が緩やかな稜線を形成し、青荷川の水源地域が標高 1,000m を超える山岳地域となっています。
- 八甲田がもたらす豊かな水の恵みは、米やりんごなどの農業をはじめ、酒造業、温泉など黒石市の産業とも深く関わり、暮らしに潤いを与えてくれるものです。



浅瀬石川沿岸から八甲田連峰への眺め

図 黒石市における地形・水系（参照：黒石市景観計画）



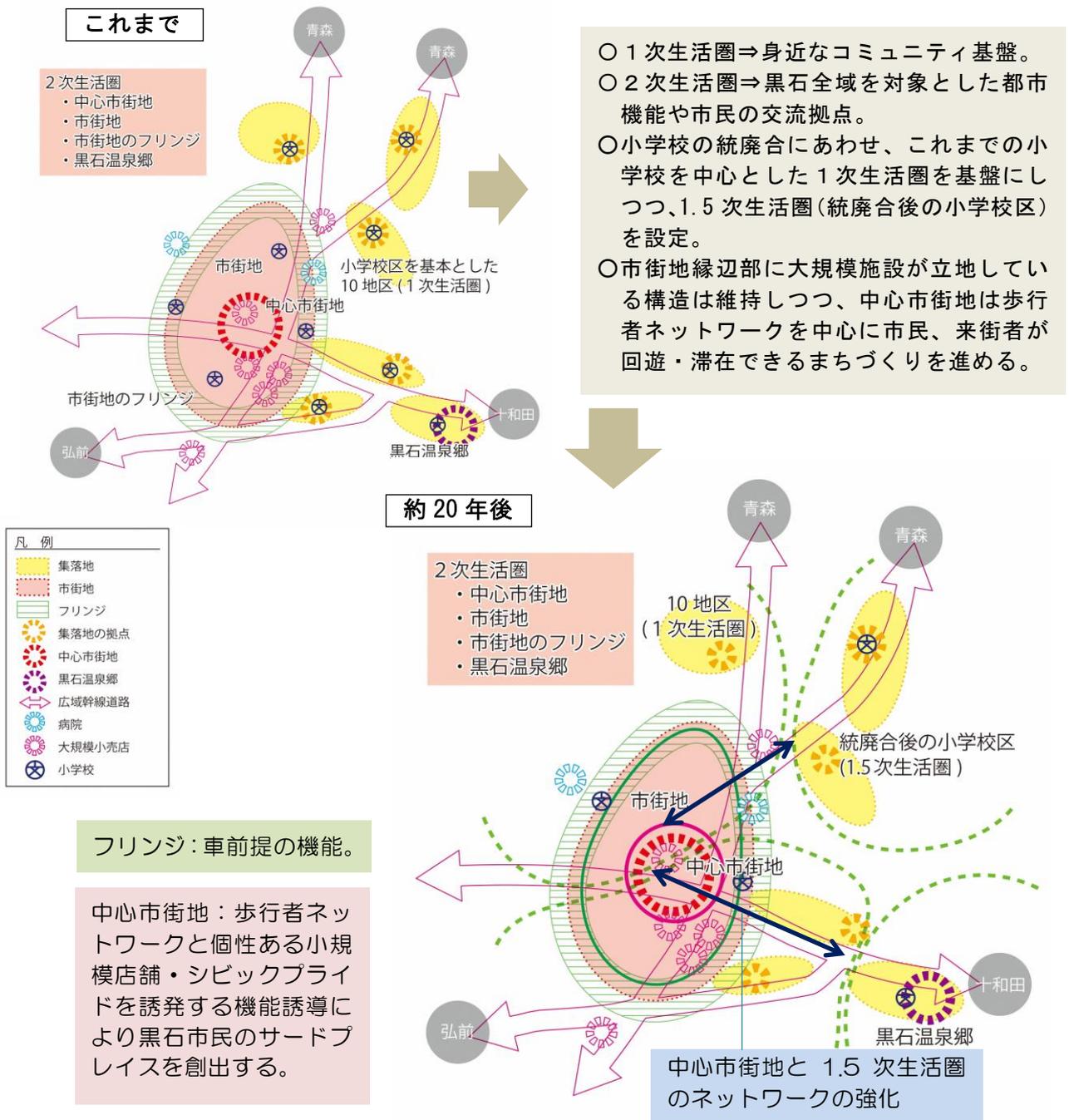
2) 生活圏の現況と将来イメージ

黒石市では、小学校区を基本とした 10 地区ごとに協議会の活動や地域の行事・祭礼が行われ、身近なコミュニティ基盤（1 次生活圏）が形成されてきました。

これらの 1 次生活圏は今後も地域での暮らしの基盤として維持しつつ、小学校の統廃合にあわせ、1.5 次生活圏（統廃合後の小学校区）を設定し、身近な日常生活の機能や魅力を確保しつつ、中心市街地へのアクセス性の向上を進めていきます。

また、市全域を対象とした都市機能が集積したエリアや市民の交流拠点（2 次生活圏）においては、市街地縁辺部に車利用を前提とした大規模施設が立地している構造は維持しつつ、中心市街地は歩行者ネットワークを中心に市民、来街者が回遊・滞在できるまちづくりを進めます。

■生活圏のイメージ



■生活圏と将来イメージ

これまで

10地区（1次生活圏）
 ○小学校周辺をコミュニティ拠点とした生活圏。
 ○祭りや伝統行事、農作業等の共同の範囲。

中心市街地（2次生活圏）
 ○行政施設や金融機関、診療所等、中町こみせ通りをはじめとした歴史的資源が集積する観光交流の拠点。

市街地
 ○一定の密度で住居等が集積。
 ○幹線道路沿道には、黒石市全域の暮らしを支える機能が立地。

市街地・用途地域の縁辺部
 ○大規模小売店やホームセンター、病院、入所介護施設等の車利用を前提とした施設の立地。

黒石温泉郷
 ○観光関連施設が集中しており、中心市街地と並ぶ観光交流の拠点。

約20年後（将来人口推計2035年：25,111人）

1次生活圏／1.5次生活圏
 身近な日常生活の機能・魅力の確保
統廃合後の小学校区（1.5次生活圏）
 ○身近な日常生活の機能や魅力を確保しつつ、中心市街地へのアクセス性を向上する。
10地区（1次生活圏）
 ○日常生活の身近なコミュニティ基盤。
 ○コミュニティ、資源、農、環境を活かす、『まち育て』。

2次生活圏
 多世代・市内外の人との交流、サードプレイスの創出
中心市街地
 ○現在の都市機能集積を維持しつつ、市民、来街者が回遊・滞在できるまちづくり。（拠点施設、こみせ、店舗、オープンスペース等）
 ○歩行者ネットワークの充実とシビックプライドを誘発する施設等の誘導。
 都市機能誘導区域の施策との連携

市街地
 ○人口密度の維持。中心市街地や周辺市町村への通勤・通学の利便性を求める層の受け皿。多世代の人口集積の誘導。
 ○黒石市全域の暮らしを支える機能の維持。
 居住誘導区域の施策との連携

市街地・用途地域の縁辺部
 ○黒石市全域を対象とし、現在の車利用を前提とした大規模施設等の立地を維持。

多世代・市内外の人との癒し、レジャー機能の維持・創出
黒石温泉郷
 ○客舎や交流施設、温泉を活かし、癒し、レジャーの拠点として、回遊・滞在を促すまちづくりを進める。
 ○中心市街地との連携により、黒石市の観光交流の一体的な魅力を創出する。

3. 市民意向調査結果

市民・事業者アンケートやインタビュー等より、地区ごとの暮らしの現況や都市機能のニーズを整理します。

1) 地区ごとの暮らしの現況

(1) 市街地（用途地域を含む地区：追子野木、東、西部、中部）

- コミュニティ施設の利用や日常的な買い物等については学区内で行われることが多いが、病院や文化活動などについては郊外部又は市外で行うという意見が多い
- コミュニティ施設など身近な施設への移動については徒歩や自転車という意見もみられるが、自家用車での移動が主となっている

(2) 郊外部（山形、牡丹平、六郷、上十川、浅瀬石、北）

- コミュニティ施設の利用は学区内が主であるが、日常的な買い物や医療施設の利用は市内（各地区の学区外、黒石駅・市役所周辺以外）や市外での利用が主となっている
- 金融機関は市街地での利用が多い
- 自家用車での移動が主である

(3) 地区内の都市機能ニーズ

【地区で充実してほしい施設（都市機能へのニーズ）】

- ほとんどの地区で買い物、飲食などの商業施設に対するニーズが5割を超える
- 牡丹平、追子野木、北では医院・診療所に対するニーズが比較的多い
- 東、西部、中部ではスポーツ・文化施設に対するニーズが比較的多い

【地区のまちづくりで重要と考える取り組みについて】

- 商業や医療、福祉などの機能の充実、ゆとりある住環境づくりに対する意見が多く、子育て支援に対する意見も住環境づくりに対する意見とほぼ同様に多くみられる
- 山形や東、西部、中部などの地域資源を活かした観光に対する意見が多い

地区の暮らしの現況と地区内の都市機能ニーズ（まとめ）

- 学区内（地区内）にコミュニティ施設があり、地区住民が主に利用している
- 市街地の商業施設や医療施設が各地区の日常生活を支えており、学区内だけで完結している地区はない
- 家電等については市外が主となっており、総合病院、文化活動などは市内だけではなく市外で行うという意見も多くみられる

2) 黒石市全域のまちづくりと都市機能のニーズ

- 中心市街地における賑わいや魅力、市内の商業施設の充実に対するニーズが高く、既存の商店街の充実や商業地としての活性化を図ることが求められている
- 集落地などにおいても中心市街地の活力向上が求められている
- 公共交通の利便性や歩行空間などの交通環境の充実、教育文化施設の充実、子育て支援機能の充実が求められている
- 企業の立地や産業の盛んな地域づくりが求められている
- 市内の自然環境や歴史的・文化的資源に対する評価は高く、これらを活かすまちづくりが強く求められている

黒石市全域のまちづくりと都市機能ニーズ（まとめ）

- 中心市街地における求心力の高い魅力ある商業施設、賑わいに資する商業施設の導入
- 市内の教育文化施設の充実
- 雇用促進、経済活動に係る都市機能の充実（商業、業務等）
- 中心市街地における歴史や文化を活かした観光振興、回遊空間づくり

表 まちなかに必要であるとする都市機能（アンケート・ヒアリング結果）

分野	施設
医療・福祉・健康 関連	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援施設 ・医療、かかりつけ医 ・体を動かせる場所（ジム、ヨガスタジオなど） ・リハビリ関連（教育を含めて）
商業・業務関連	<ul style="list-style-type: none"> ・飲食・カフェ、古民家カフェ、ドッグカフェ ・マルシェ（移動市場など） ・映画館 ・宿泊施設
教育・文化関連	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館（カフェなどと一緒にあった複合的な施設、かぐじ広場での移動図書館） ・音楽活動の場、DJブース ・趣味に取り組める場所（音楽、クラフト、料理など）
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・公園 ・自由に使えるスペース ・子どもが遊べる場所（屋内） ・高齢者が集う場所 ・温泉郷との連絡 ・文化会館の再開 など

4. 現況と課題のまとめ

1) 現況と今後の課題

(1) 人口動向・今後の見通し

- 平成2年以降市全体の人口は減少傾向にあり、今後も人口減少、少子高齢化が進むことが推計されています。特に、中心市街地や山あいの集落地での人口減少が顕著となることが懸念されています。
- 若い世代の移住・定住に向けたまちづくりの検討の一方で、市民の意見では小児医療など子育て支援機能の不足が挙げられています。

【課題】

- 若者の定住化や出生率向上に係る取り組みを進め、子どもや子育て家庭が安全・安心して暮らせる環境づくりが必要です。
- 高齢者への医療・介護サービス需要への対応や健康づくりの促進等が必要です。

(2) 生活利便性

- スーパーや医療施設など主要な施設が市街地の縁辺部や幹線道路沿道に立地し、多くが自家用車での利用となっています。
- 居住地内を概ねカバーするようバスルートが整備されていますが、利用者は少なく、使いやすさやバス停周辺の商業等施設立地などに対するニーズが多くみられます。
- 小中学校の統廃合に伴い、郊外部において、通学距離が延びる児童の安全性確保や地域のコミュニティ活動の場の不足などが懸念されます。

【課題】

- 人口減少の中、生活サービス機能*等が将来にわたって維持されることが求められます。
- 自動車に頼らなくても生活できる都市機能の配置や都市構造の構築が必要です。
- 市民が住み慣れた地域に暮らし続けられるよう、身近な場所における生活サービス機能の配置や地域コミュニティの維持が必要です。

*）日常生活を支える上で必要な機能で、スーパーなどの商業施設や銀行等金融機関、医療施設、福祉施設などをいう。

(3) 都市・生活の拠点性

- 中心市街地に公共施設や商業施設、金融関連施設が比較的集積しているが、市民の満足度は低く、空き家・空き地の増加など都市の中心としての求心力の低下がみられます。
- 地域のコミュニティ活動などは身近な場所で行われることが多くみられます。
- 既存の商店街の充実や公共交通の利便性が高い地区での商業施設の誘導・集約など、まちの拠点となる商業地を充実させることへのニーズが高くなっています。

【課題】

- 鉄道やバスなど公共交通の結節点であることから、交通の利便性向上や市街地における多様な都市機能の集積と魅力の向上によるにぎわいの創出が必要です。
- 市民の地域への愛着を育むためにも、地域の歴史や文化、豊かな自然環境を守り活かした環境の充実が必要です。
- 地域ごとで歩いて暮らせる生活拠点の形成が必要です。

(4) 環境、産業

- 本市の特徴である広大な田園や山林など自然環境に恵まれていることが市民の評価としても高くなっています。
- 田園や山裾のリンゴ畑など農業が盛んではあるものの、近年は農業従業者数の減少が続いています。
- 特別豪雪地帯で、冬季の積雪時など外出機会の減少がみられます。

【課題】

- 農業などの産業振興や担い手育成等に向けて集落機能の維持・強化が必要です。
- 人と環境にやさしい、公共交通を主とした交通環境の構築が必要です。

(5) 行政運営

- 人口減少・少子高齢化による自主財源比率が低下しています。
- 老朽化したインフラ等都市施設の整備費が増大しています。

【課題】

- 公共施設や都市施設の適切な維持管理が必要です。
- 効率的な除雪による経費の縮減など行政サービスの提供の効率化が必要です。

2) まちづくりの課題の整理

現状や将来の見通しなどにより、本市の人口減少、少子高齢化に伴うサービス機能の低下や財政の悪化などが懸念されます。今後、持続可能な都市であるためには、都市の個性を大事にしつつ活力を高め、誰もが健康で暮らしやすいまちづくりを進めることが求められます。こうした点を念頭に、今後のまちづくりを進めていく上で解決すべき主要な課題を次のように整理します。

課題1：中心市街地の低未利用地の増加

—都市の活力を維持し、充実した暮らしを支える環境づくりが必要—

- ・中心市街地内の低未利用地や空き家・空き店舗の増加など、適正な管理や再生等による多様な都市機能の誘導を図り、本市の中心市街地としての活力向上が必要。
- ・子どもからお年寄りまで多様な世代が健康で豊かに暮らし続けられるよう、都市機能の維持・充実を図ることが必要。
- ・働く場や買い物の場など、暮らしが充実し楽しめる環境づくりが必要。
- ・居住や観光のみならず、地域に関わる関係人口の拡大に向けた、都市の魅力づくりが必要。

課題2：中心市街地の歴史的資源の喪失

—中心市街地の価値や魅力高め、関係人口の拡大を図ることが必要—

- ・黒石の歴史や文化を活かした固有の魅力づくりとともに、多くの人々が交流・関係しやすく心地よい居場所づくりが必要。
- ・中心市街地と地区の生活拠点を結び、暮らしやすさや移動しやすさを確保するとともに中心市街地への来訪を促すことが必要。
- ・市民のシビックプライドの醸成により、暮らし続けたいと思えるよう黒石の魅力を高めることが必要。

課題3：コミュニティバスの利用減少

—公共交通の利用促進による暮らしやすさの維持・向上が必要—

- ・コミュニティバスの利用者減少による公共交通サービス低下や維持が困難になるおそれがあるため、利用を促進し移動手段の確保を図ることが必要。
- ・公共交通の利用目的の拡大や利用者の生活に根ざしたルート・時間の設定、地区による運用など、多様な取り組みにより利用促進を図ることが必要。
- ・公共交通への関心を高める取り組み（モビリティマネジメント）が必要。